

四年丁卯の春正月、諸の王・諸の臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に作る歌 并せて短歌

九四八番

ま葛延ふ 春日の山は うちなびく 春さり行く
と 山峡に 霞たなびき 高円に うぐひす鳴き
ぬ もののふの 八十伴の緒は 雁がねの 来継
ぐこのころ かく継ぎて 常にありせば 友並め
て 遊ばむものを 馬並めて 行かまし里を 待
ちかてに 我がせし春を かけまくも あやに恐
く 言はまくも ゆゆしくあらむと あらかじめ
かねて知りせば 千鳥鳴く その佐保川に 石に
生ふる 菅の根取りて しのふ草 祓へてましを
行く水に みそぎてましを 大君の 命恐み も
もしきの 大宮人の 玉梓の 道にも出でず 恋
ふるこのころ

反歌一首

九四九番

梅柳 過ぐらく惜しみ 佐保の内に 遊びしこ
とを 宮もとどろに